This paper aims at analysing the traditional industries and spatial configuration in Akakina, Amami City, Kagoshima Prefecture, which is under official assessment for selection of important cultural landscapes, and suggesting which industry-related landscapes should be conserved.

As a result of this research, it was found that in Akakina, while rice paddies and fields were formed in the Palaeozoic area suitable for crop production, residential grounds were developed in the alluvial plain of sandy soil where well water could be conserved. Although the maritime industry, the shipping industry, the sugar industry, and agriculture have grown in Akakina, at the present time, institutions from the early modern times such as schools, government offices, roads and the zoning system coexist with the agricultural land supplying materials to the sugar industry established in the same period. Considering the condition of the traditional industries and spatial configuration, it can be argued that agricultural and residential landscapes should be conserved.

**Keywords:** Akakina, Amami-Oshima, The Sugar Industry, Cultural Landscape

赤木名, 奄美大島, 製糖業, 文化的景観

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

集落景観は, 地域の気候や地形をもとに, 住民が生活・生業を営みることで形成され, 歴史, 文化, 技術の革新などによる住民の生活・生業の変化によって変容していいく。現在我々が目にしている集落景観は, 広大なる生活・生業の変化による景観変容の結果であるため, 景観の変遷の過程が捉え難くなっている。しかし, 集落景観には, 伝統的な景観とも言える, 気候, 地形, 生活・生業等から必然的に決定される土地利用や景観変容の規律性が存在する。この伝統的な景観は, 永年の試行錯誤の末に成された知恵であるため, 景観を保有する際だけでなく, 新しく建造物を設計・建築する際の一助ともなる。伝統的な景観を明らかにするためには, 景観を形成するシステムである生活・生業に向き合い, 景観がいつ, 如何なる生活・生業によって形成されたかを明らかにする必要がある。本研究では, 特に生活・生業と空間構成の着目し, 鹿児島県奄美市赤木名（以下, 赤木名）の生活・生業, 空間構成の変遷を明らかにし, 生活・生業と空間構成の関係を明示することを目的とする。

本研究の対象地で, 赤木名は, 奄美島中部の奄美大島（以下, 大島）の北部の生業半島に位置する。大島は, 15世紀中頃から琉球の支配下, 慶長14（1609）年から薩摩藩の直辖地となり, 昭和20（1945）年から昭和28（1953）年までは, アメリカの統治下に置かれた。赤木名は, 西側に天然の港とされる笠利湾, 北側, 東側, 南側を標高約120mの丘によって取り囲まれる面積約6.7km²の地区で, 建造物, 林業, 農業, 商業が営まれ, 近代から昭和初期までは海運業も栄えた。赤木名では, 落ち着いた生活から建造物が順次に変化するため, 近世以前の建造物は1件確認されるのみである1)。このように, 赤木名は, 古い建造物が少ないこと, 総数の生業により景観が形成されていることから, 伝統的な景観を視覚的に捉え難い地域である。本研究では, 生業と空間構成の関係を丁寧に分析することで, 伝統的な景観を視覚的に捉え難しい地域でも, 伝統的な空間構成を明らかにすることが可能であると推測される。また, 大島では平成20年度から文化遺産把握モデル事業等により, 急速に歴史研究が進められ, 200点以上のか消失も確認されている。しかし, 分析されている資料は20点ほどであり, 近世時代, 行政の中心地であった赤木名の歴史の解明が特に求められている。そのため, 本研究によって赤木名の生活・生業を明らかにしたいと考える。
赤木名の空間構成を明らかにするには、大島の歴史研究においても意
義があると推測される。以上から、赤木名は本研究の事例研究に適
していると考えられる。

1-2 既往研究と本研究の位置づけ

絵画や地図を用いた研究では、ダニャ・バオルッチ、宮脇 が
複数の絵画および地図を重ね合わせて CAD データベースを作成し、
土地利用の詳細な履歴等の把握を行っている。調査年代は、1786 年
から 2004 年で、いずれも地図や地台帳を利用して分析している。

水口・西山 は、その手法を用いた咲庭、現在の地
形を分析することで白川村荻町の空間構成を明らかにしている。

本研究では、土木会社に土木利用の地名の土地利用を
明らかにする一方、近世時代の絵画と矢次筋、咲庭、築地調査
結果を利用して空間構成を分析している点が新しい。また、それら
の研究は土地利用の情報を分析対象としているが、本研究では、屋敷地
についても空間構成を分析し、生活と空間構成の関係性について
明らかにしている点が既往研究と異なる。

山口・西山 が大鹿谷の里山において、窪業と景観構成要素
の様式、配置に着眼して窪業の持続と景観形成の関係を明らかにし
ている。咲庭における研究では生業と景観の関係性を明らかにして
いるが、本研究では生業と空間構成の関係性に着目している点が既
往研究と異なる。さらに、山口の研究では、1-2 の生業に対して生
業と景観形成の関係を明らかにしているが、本研究では複数の生業
と空間構成に着目している点が新しい。

赤木名の空間構成に関する研究には、旧七谷町内有志によって作
られた「咲庭町誌」がある。そこでは、古文人の伝承を「嘉永・嘉
永」の咲庭地図（以下の「咲庭地図」の写し）が掲載されている。また、
高橋 総合公園公開講座学会配布資料 では、丸田光男によって作
られた「大正・昭和15年版の赤木名咲庭地図」（以下、「大正・
昭和地図」）が掲載されているが、大正・昭和初期の赤木名の様子が
示されるものである。本研究では、上記の調査では行われていなかっ
たそれらの地図を現在の地図図上に復元する作業を実施している。

1-3 研究の方法

赤木名の生業の変遷を明らかにするために、大島の生業に関する
文献資料を調査した。さらに現地調査において製糖業、繊維の作業
現場に様子を記録し、住民へのヒアリングを実施することで、生業や
製糖業、繊維の作業工程、作業内容の変遷を明らかにした。

赤木名の空間構成を明らかにするために、①嘉永 4（1851）-5 年作
成 ②の「咲庭地図」、②「明治 12 年矢次筋全大島郡里村」、③「明治 12
年矢次筋全大島郡金久村」（以下、「矢次筋」）、③明治 36 年作成（作
成年代の考証は ②参照）の「里字田園」、④「里字田園」、⑤「里字田園」、⑥「里字田園」、⑦「里字田園」、⑧「里字田園」の地図を分析した。

②明治 12 年作成だが、豊美大島では明治 8 年まで仮屋が置かれたことから、近世赤木名の集落全域の土地利用が
確認できる資料と考えられる。①、②は住居地に集中する地区（以下,
集落）における建築物の用途や住居者、他の資料は集落部の全土
地の土地利用を記録されている。赤木名の昭和初期以降の地図は他に
も存在するが、その多くが公共工事に際して作成した部分的な地図
であるため、空間構成の分析に適している集落の詳細を全土の土地
利用を記録している上記の資料で分析を行った。資料の詳細な地
図及び地形図（平成 8 年作成）への復原作業については 4 で詳述
する。屋敷地内の空間構成の変遷と生活・生業の変化の関係を明ら
かにするために、伝統的な建築物が現在の屋敷地 11 件を調査した。
現存の屋敷地の配置図のもとに、居住者へのヒアリングを通じ
ることによつて、昭和初期の屋敷地の復原図を作成した。

以上の調査結果を考察することで、赤木名における生活・生業の
変遷と空間構成の関係を明らかにした。

2. 赤木名の地形と歴史

亜熱帯気候の奄美、沖縄諸島は、日本列島南部海域に大小 188 島
嶼の弧状列島をなす全長約 1300km に及ぶ伴洋上に点在する。奄美諸
島はその北端において鹿児島から約 370km（航路距離）、最南端の与
論島まで 592km におよび、人々の常に訪れる島は北から奄美大島（以下、
大島）、衣笠、喜界島、加計呂麻島、諸島、与論島、德之島、沖永良部島、
与論島の 8 島に至る。大島は、発生層とそれを貫く火成岩からなり
て、赤木名では砂岩からなる緻密な層に集合が形成されている。大島
北部は、大島南部に比べて低地をなしており、海岸線は急峻な山岳
生の地形で、海岸線は砂丘とサンドブームを有し、海浜を主とした狩猟
採集生活が営まれていた痕跡が残る。現在の赤木名でも、植物と共に
魚貝類の獲物が今も住民の生活基盤になっている 60 の。

笠利半島は 15 世紀における琉球の南辺基盤、笠利半島は 15 世紀末
には豊後水道への航路と九州西方に北を北とする航路の端として軍事
と海上交通の要地としての役割を果たした 61 の。赤木名はその笠利半
島の中でも天然の良港とされる笠利半島岸に広がってい
ることもあり、15 世紀末に山城（グスク）が築造された。大島は
15 世紀中頃より琉球の支配下になり、慶長 14（1609）年、島津氏が
大島を侵攻した結果、薩摩藩の直轄地となった。薩摩藩は舘役人（以
下、薩摩役人）を大島に派遣し、慶長 18（1613）年から代官が仮在
立をいう仮屋（以下、代官仮屋）が大島に設けられた。大島同様に
仮屋が設けられた薩摩島、徳之島では仮屋の移動がないのに対し、
大島では大島、大熊、赤木名、大熊、赤木名、赤木名美久村、伊
津部村の頃に仮屋が設けられた。赤木名は、延宝 3（1675）年から享和
元（1801）年までの 126 年間 62 の、すなわち大島で最も長い期間、代
官仮屋が置かれて、近世大島の治世中の地となった地区である。享和
元（1801）年に代官仮屋が伊津津（現在奄美市伊津津）に移され、以降
赤木名は大島北部の行政の中心地となった。新世代大島旅人や大
島出身の島民によって治世され、赤木名では上納の米と黒蜜、
違違用の鉄、自給用の野菜、果樹の生産が行われた。

大正から昭和初期までの赤木名には、通船倉や海運業を営む旅館
などが置かれ、大島北部の中心的な港町として栄えた。アメリカか
ら日本に復帰した後の赤木名でも鉱産業に従事する若者を数え علم
する。現在でも、近世時代の代官仮他、藩主御府、海辺沿いのサンゴ
の石礁、大正・昭和時代の商店などが残り、上記の歴史を視覚的に確
認する事ができる。赤木名の海岸に大型船が出入できないことか
ら、昭和 37 年頃から海運業は営まれなくなったが、赤木名には現在
も約 500 世帯が居住し、大島北部の行政の中心地の役割を担っている。

3. 赤木名における生活・生業

(1) 製糖業

大島に蓄積倶付と砂糖製造が伝わったのは江戸時代（1608）～55 年
で、大島は砂糖交易の拠点地ともされる。大島北部は昔から製糖業が盛んで、赤木名では昭和37年まで、産業者約5人がサヤドリに寄合って製糖していたが、昭和34年、帯利町の農業部会で「農家の経済安定を図るにあたり、大型製糖工場を設置して生産コストを引き下げる、製糖化するしかない」（帯利町案）として大型製糖工場を赤木名に誘致する方針が決定し、昭和37年から富国製糖工場が開業開始する。

現在の赤木名における砂糖製造の工程は、原料の準備、収穫、穂摘、穂運送、穂設備、穂出荷で1                                                                                                           製糖化するしかない（帯利町案）として大型製糖工場を赤木名に誘致する方針が決定し、昭和37年から富国製糖工場が開業開始する。

現在の赤木名における砂糖製造の工程は、原料の準備、収穫、穂摘、穂運送、穂設備、穂出荷で1

（1）収穫

奄美における養蚕の歴史は奈良期以前まで遡り、近世時代は上流家庭の婦女子が自家用や狭間役人の進物用として大島錦が使用されてきた。明治22年の国内養蚕博覧会において大島錦が注目されたことと明治25～26年以降黒繭の価格が下落したことから、黒錦生産から闊生産に転換する者の増加した。戦時下では大島錦は生産されるなくなるが、昭和25年から闊生産が再開する。元来、大島錦の生産が盛んな地域は、龍郷、大笠利とされていたが、昭和40～50年代の全国的な大島錦ブーム時には赤木名でも織工数が250人（昭和51年）に達した。昭和50年代後半から黒繭生産との競合により大島錦の生産数が減少し、ピーク時には29万反あった大島全体の黒繭生産数は、現在4.5万反になっている。現在の織業の工程は、（1）図案作成、（2）染色、（3）絵はり、（4）絵絵、（5）染色、（6）鉄冷、（7）染錦（8）生産の準備、（9）織錦、（10）製品検査である。まず、図案を作成し、それに必要な絹の長さを数え、庭先に糸を張り、織機で紡績させる。図案に合わせて模様をつけるため、防染用の木綿糸を紡錘に織りしめる（自織錦）。デザインは呼ばれている木綿を茶色に染めてから入れて染めること（染色）を30回ほど繰り返した後、皿上で繰り返し染める（染織）。木綿織物は、色を変じ、各織物の本数を調節した後、各織機に材料を配る。織機は手織りの機で織機織し、奄美市名倉の場大島錦共同組合で製品検査が行われる。生計は昭和初期まで大島で生計していたが、現在は海外から入っている。

昭和初期までの赤木名では、養蚕、染織づくりから検査までされているが、それぞれの作業工程で技術的な必要なため、現在は工程ごとに大島全体で分業されている。現在の赤木名では、機織を行い機織工と大島の機織工を取扱いめる親知が必要であり、①を親知りし、②を親知りし、③を織工が行う。自宅の下で利用して機織りがされることが一般的であったが、大島錦生産の盛期である昭和40～50年頃の赤木名では一部の屋敷内に編工場がつくられ、赤木名では多くの女性が絹織に従事し、編工場で機織りの技術を学んだ後、自宅の下で機織りを行った。現在赤木名で稼働している編工場は1件のみで、機織工は自宅の自宅の下で行われている。

（3）海運（運送業）と商業

明治時代に入り自由交通ができるようになると、鹿児島や大阪等の船の赤木名港に水運。赤木名では、黒錦を出荷し、米、大豆等の生活用品を入荷した。大島北部の住民の生活物資を提供する商店や黒錦、縞の買付する商人が住むための旅館が建てられた。

塩利川の立地（図4参照）に鹿児島や大阪等からの船が集うと旅館業と海運業を営む池田組によって「ナカニ組合」と「カヨイシ組合」が組まれた。両組合は赤木名住民で構成され、農業や紡業兼で海運業を行っている。ナカニ組合が購入販売組合から黒織物、縞織業組合から縞織業の現在の鉄道を通って赤木名港の運送船まで運び、カヨイシ組合が作製船で鹿児島や大阪等の船等で荷物を運ぶ。両組合は鹿児島や大阪等の船から赤木名の商店へ縞織物を運送した。赤木名港では自生黒織物を出荷しているが、それらの出荷量は一定ではない。例えば、黒織物から紡錦に転化する者が増えた昭和25年頃の赤木名港では、明治22～23年と比較して黒織物の出荷量が1/8まで減少し、縞織物の出荷量が3倍増に増加している。

昭和37年から船航が大型化し、遠洋の赤木名港が使用されなくなっ

と地方運送業は既設されていた。現在、海運業を営む家は赤木名にないが商業は営まれている。赤木名で商業を営む者は明治時代以降に地元から移住した者が主で、商業である。特に昭和40～50年代には紡業の繁栄により、紡業従業者や販売品を販売する者が増えた。現在の赤木名では、大島北部の住民の生活用品を供する商店や飲食店が営まれている。

（4）農業

赤木名では、近代時代から自給のために稲作が営まれており、明治時代の赤木名は大島のなかでも稲作が盛んな地域であった。昭和37年の農業経済調査の調査により第5次の田に艶を磨けた後、昭和47年～49年の目二の減農政策により田を放棄する者が相次ぎ、翌年の地元稲作高校校長の指導のもと放棄田に乗じて種が植えられた。現在の赤木名では稲作は営まれていない。昭和30年代までに野菜を経済作物としていたが、衰退し、現在は集荷用の果樹の生産が行われ
4. 資料の詳細と地図上の復原作業

空間構成を分析するためにあたり、現在の地図及び地形図上の復原が必要な資料については以下の作業によって復原を行った。

(1) 納次帳（筑波公文書館蔵）

近世時代、宅帳やそれに準ずる土地は異動の確認や公権、徴収権の維持、土地現況と所有者の管理のため、「名寄帳」もしくは「検地帳」等の公簿が作られた。明治になり、それらに対応するものとして、対象区域の地価や地租等を決定するためにまとめられた台帳である「番次帳」が作成された。大島では一部の地域で天秤町の集落地帳が確認されているが、赤木名等寄帳や検地帳は確認されていない。赤木名地の土地に関する公簿で最も古い資料は明治12年作成の番次帳であるが、赤木名地地区のうち外金久の番次帳が確認できないため、本稿では里と中金久のみ番次帳で分析した。番次帳は紙に集落名を写成年代、内部に字、地番、地種（地目）、持主姓氏（所有者）が土地一筆ごとに記載されている。番次帳は通常、土地の年次・年月・変更様式を反映するため、赤木名地・鍬名地・備名地（赤木名地内の一室の）の全件の石碑を対象とし、赤木名地墓地535軒、前庭墓地11軒を抽出した。墓地調査では、美大麦教育委員会の協力をもと、墓地の配置図と剥皮を作成し、墓石の石材、墓石に刻まれている成名、俗名、没年月日、事跡等を記録した。その調査結果をもとに墓石の石材、様式を編年し、幕末墓地、番次帳、字帳、古文書と照合した。以上の墓地調査の結果、平成23年2月の赤木名墓地調査において確認された墓石の一つが「湯前玄益」の墓石であることが判明した。「湯前玄益」の墓石は、藩師職人が使用する石材が作用されており、近世後期の形式化様式でつくられている。墓石の四面には事跡が記載されており、風化して没年月が読み取れなくなったものとの「湯前玄益…大島在」と書かれている。これらの墓石の特徴から、「湯前玄益」は近世後の藩師職人の中でも高い地位を有する者と推測された。

「湯前玄益」の墓石が現在も管理されていること、赤木名地では土地所有者が番次帳から大きく変わっていないことから、「湯前玄益」の墓石の所有者を明らかにするために、代替の本仏屋敷の場所が特定できると推測された。墓地の所有者に関する資料もなく、535件の墓石がある赤木名地では、ヒアリング調査によりその墓石の所有者を特定することが難しかった。しかし、平成24年2月、「湯前玄益」の墓石が置かれていた場所にM家の墓石が置かれていた。M家の墓石について調べると、現在上里10番地に住むT家からM家に嫁いだ女性の墓であり、「湯前玄益」の墓石がT家のものであることが明らかになった。番次帳では上里10番地の土地所有者がT氏になっていることから、墓地調査の「湯前玄益」の区割りが代替の本仏屋敷であることが明らかになった。

以上の調査、分析により、幕末墓地を現在の地図上の復原した結果、墓地は番次帳は正確ではないものの、区割りの形状、有力者の居住位置は正確であることが明らかとなった。

(4) 大正 - 昭和初期の地図（美大麦蔵） - 現在の地図

大正 - 昭和地図については丸田光武氏（現美大麦中林久在住）に

- 1582 -
き取り調査を行ったところ、原本は丸田氏が所有しているが現在行
方が不明であること、地図は丸田氏の記憶と地図作成時の古い
聞き取り結果から作成されたことが明らかになった。本研究では、
大正 - 昭和初期の写真で分析を行うとともに、住民への聞き取り調査
を実施することで大正 - 昭和初期の地図を修正し、現在の地図上に復
原した。

本研究では調査に供された昭和 40 〜 50 年代の赤名木の空間構成を
分析する必要があるが、現在の赤名木で昭和 40 〜 50 年代の地図は
確認できない。よって、本研究では、大正 - 昭和初期地図と昭和 6 年
の住宅地図、昭和 40 〜 50 年代赤名木の商店の領取（旧赤名木街画報）
をもとに、S.T.氏（60 代男性）、T.A.氏（80 代男性）一ヒアリング調
査を実施することで昭和 40 〜 50年代赤名木の様子を地図上に復
原した。現在の地図、現在の地図、住宅地図をもとに分析し、
集落においては平成 23年2月に現地調査を実施し、現況の土地利用
を記録した。

5. 集落における空間構成の変遷
(1) 近世時代

図 2 の幕末地図が作成された頃、代官屋敷は他の地区に移ってい
るため幕末地図に代官屋敷は記載されていない。伝承では、図 3 の
湯前玄益の区画に文闘 12 (1862) 年から代官屋敷が置かれたとされ
る。代官屋敷が置かれた当時は、北から東屋敷、本屋敷、屋敷内屋敷、
西屋敷が置かれた 5)。近世大島は 7 つの行政区（笠利、具楽、屋敷内、
西、東、住用、古見）が設けられたため、本屋敷は代官屋敷、東屋
敷は東間切、西屋敷は西間切、屋敷内屋敷は屋敷内間切の諸役の仮
屋と推測される。宅転転では代官屋敷が置かれた区画内かつ前田川
治いの上里 15 番地が「溜池」であることから、近世時代はその場所
に船塚が立っていたと考えられる 33)。当時の前田川は水深
が浅かったため、笠利湾に船を停め、前田川を利用して小舟で代
官屋敷へ人荷輸送したと推測される。

嘉永 4 〜 5 年の赤名木では、井戸水が得られる砂質土の沖積平野
上に住宅地が置かれている。仮屋と人里役、横目役所 13)の前を通
り、外金久に接する道（道①）と仮屋と船縁を結ぶ道（道②）がある。
幕末地図では、塩入道が道①を分断していることから、馬や牛を
用いて船縁荷物を運ぶ際に道②、徒歩で集落内を見回る際は道①
を利用したと推測される。黒糖等の積出を行った船縁は、屋仁集落
と笠利集落へ続く道の交差点に河川を利用してつくられている。

嘉永4〜5年までに薩摩藩の土佐分析である郷土史 33)が与えられ
た島民人 33)は、嘉永年間には与人役所、横目役所の近郊に屋敷を
構えている。砂糖積出を監視する津波島は嘉永年間には前田川と
船縁の近くに屋敷を構えているが、他の横目郷や宅屋敷は幕末地図で
は確認できない。また、嘉永4〜5年には薩摩藩の湯前玄益、白尾
伝右衛門が上里 10 番地、上里 1 番地に居住しており、宅転転でも代
官屋敷が置かれた上里 10 番地の近郊に同名の人物が居住している
ことから、薩摩藩人は代官屋敷の近郊に居住していたと考えられる。
すなわち、近世赤名木では、役職により居住する場所が決定し、代
官屋敷の近郊に薩摩役人、与人役所と横目役所の近郊に島民が居
住する傾向が観られる。

嘉永4〜5年の赤名木については、秋葉、天神、弁天が置かれている。図
3 で秋葉が置かれている丘は、琉球治世時代に山城（グスク）、薩摩
治世時代に薩摩藩の菩提寺（観音寺）が置かれた場所である 33)。嘉
永 4〜5年の赤名木では、墓地が集落端の砂浜と高台の 3 番所に置か
れている。幕末地図には集落東に「田」と書かれており、当時の赤名
木では古生層上で栽培が行われていたことが確認できる。近世時代、
赤名木に寺子屋が 2 件あったとされるが所在地は不明である。

(2) 明治時代

明治 36年の赤名木では、中央部を東方向に前田川が流れ、そこ
に流れる南北方向の沢水と塩入川により、3集落（里、中金久、外金久）
の集落境界が設けられている。明治 12年、明治 36年も嘉永年間と
同様に主に中金久に宅地が広がるが、明治時代から外金久の宅地開
拓が進んだため、大島や鹿児島出身の知識を有する者が外金久の新
しい宅地を購入している。横目役所、代官屋敷があった土地は全て、
明治 12 年には氏有地になっている。明治 11 年、嘉永时代に与人役
所だった区画に赤名木小学校が創立される。明治 33 年には赤名木小
学校が創立し、それを機に与人役所跡の近郊の土地にも小学校が
つくられ、その隣に役所が建てられた。

明治 36年の赤名木では、嘉永年間同様、集落東に田が広がる。田①
（図 4）のように田は沢水が流れる河岸や段階状に設けられた狭小
棚田である。田②（図 4）のように広範囲に広がる田も狭小な棚田が
形成されていた 33)。赤名木では棚田の石積みは皆無で、自然に形成さ
れた湿地に畦をつくっている。明治 12年と明治 36年では畑と田の比
率は変わらない。近世時代の水は水取りを要する、畑①（図 4）の
ような集落近郊の水はけの良い土地で生産される。畑②（図 4）のよ
うたの畑には断続的に甘露が供えられ、畑の境界にソテツが植えられていた。赤木名の場合、田、畑は古来生産を主に砂質土の沖積平野上に形成されている。

明治 36 年の赤木名には 3 つの灌漑があった。灌漑①（図 4）は農業用水に用いられ、灌漑②は泥染に適した泥炭を含んでいたため昭和初期まで大島の泥染用に使用された。明治 36 年の赤木名では集落の出のほぼ全域の土地利用が原となっている。原では砂糖桜や生活用のスミ、ゴムの採取が主に行われ、自給用の木草の採取も行われた。赤木名の里山の多くの樹木が伐採されたため、昭和 34 年から里山の造林事業が実施されている

（3）大正時代〜昭和初期

大正時代に図 3 の赤丸②が県道として拡幅され、その県道沿いに多くの商店が並んだ。商店を営む者の多くが鹿児島出身で、商業では日用品、米、写真、本、雑貨が売され、鍋子屋、医院、理髪店もあった。集落端 3 篇所に置かれていた鍛冶屋が 1 篇所に集められ、昭和 23 年には田が造成されて笠利第一中学校が建てられた。

昭和初期の赤木名には桑畑があり、染工場の近くに白糸織工場が置かれて、昭和 37 年まで赤木名では桑の近郊か桑畑製糖工場の加熱に必要な蒸気が確保できる場所 3 篇所にサヤヤリドリが建てられていた。購買販売組合、砂糖積出場の樽を生産する製材所、検査場、池畑旅館は赤木名港に近い外金久で営まれた。

戦前の中の赤木名の戸数は、外金久 240 戸、中金久 178 戸、里 74 戸

(4) 昭和 30 年代後半〜昭和 50 年代

昭和 30 年代に水を造って笠利町教育委員会、昭和 40 年に田を造成して大島実業高等学校笠利分校が建てられた。昭和 37 年から富国製糖工場が操業され、砂糖製造が富国製糖工場で行われるようにになったためサヤヤリドリが廃絶にかかった。また、同時に砂糖積出の船舶が大型化し、赤木名港が使用されなくなったため、外金久にあった杉崎業の伝馬船綱場、池畑旅館、検査場、製材所、港船倉がなくなくなった。昭和 50 年頃には前田川の河川改修事業によって、川底が掘削され、その土砂を利用して払田と近世時代の船舶まりが埋められ、里集落の宅地開発が行われた。さらに、昭和 47〜49 年の国の減反政策によって増加した放棄田が河川改修と同時に棄油に転換された。昭和 40 〜 50 年代の全国的な大島紬ブームにより、一部の民有地に紬工場がつくられた。赤木名は大島内外の紬業従事者や紬製品業者で賑わい、主に中金久の県道沿いに商店が並んだ。以前からあった生活用品を提供する商店や理容店に加え、紬従事者や住民の娯楽

図 4 昭和 36 年頃の赤木名（地図図上に復原）

図 5 大正〜昭和初期の赤木名（地形図上に復原）

図 6 昭和 40 〜 50 年代の赤木名

図 7 現在の赤木名

注：製図用に鉛筆で記載されている。
設備である映画館が新しく建てられた。昭和初期までは赤本名に3
件あった銭割屋は農家の減少と農具を買い換える慣習が一般化した
ことにより昭和 50 年には 1 件だけとなった。
5 現在
現在の赤本名は宅地に入るための道が増えたものの、嘉永年間の
区割りから変化はなく、代官屋敷が置かれた区画の一部にはサンゴ
石垣が残る。近世時代の神社は、天神が図 3 の弁天の場所に移柵し
たもので、現在も秋葉神社、苗原神社（天神）、厳島神社（弁天）
が使用されている。明治時代に崩壊した小宮が役所は建築物は
変わったものの現在も同じ場所に置かれている。昭和 50 年代後半か
ら郵便業が衰退したが、赤本名は大島北部の行政の中心地であるため
現在でも地域中心に商店が並ぶ。平成 20 年頃から里と外金久の県道
が拡幅され、県道沿いに置かれていた商店が移転している。
赤本名には大正時代から続いている 1 件、昭和 40 〜 50 年代から続いている 11
件あるが、新しい商店も富国製糖工場の近郊にいくつかされている。
赤本名では、近世時代から現在まで、井戸水を得ることができる砂質
土の沖積平野上に集落が形成されている。赤本名

現在の赤本名では稲作は営まれず、田②（図 4）のように広

面に広がっていた田は行政の圃場整備によって、より排水性が高い
畑生産に適した畑地となった。田①（図 4）のような山中の狭い畑
は戦後以降放棄され、現在は自然に退却し草生している。畑は
草取り等の手間がかかるため、宅地周辺の平地部で耕作される傾向
があるため、現在も明治時代の畑地が耕作されている。図 4 の
甘藷のうち平地な畑には、手入れが比較的容易な果樹が植樹されている。
赤本名の場合、いずれの稲作地も近世時代から現在まで一
貫して家畜生産に用いられている。農業用水として使用されている池
は現在崩れにより埋没し、泥染めに使用された池は現在深い
敷に覆われている 1585。里山全域に広がっていた原は現在、現在も
原で風呂敷用等の薪や食用の草木の採取が行われている。

6. 屋敷地における空間構成の変遷
昭和初期の赤本名の屋敷地には、座敷が置かれる上家、台所が置
かれる下家、アトリ（自給用の菜園）、井戸、家畜小屋等が置かれて
高木や生用、サンゴ石垣で敷地が囲まれた。基本的な純農業の屋敷地
には高木が配置された。上水道が整備されるまでは、屋敷地の井戸
水は生活用水として使用し、飲料水の水は集落内の水井を使用し
た。現在、井戸水はポンプで揚げ、草木の水やり用等に利用している。

屋敷配置は、赤本名城跡（神山）を意識することなく、日照を
優先し、座敷が南側に配される。家屋を北側に配置し、敷地入口
付近に高倉、南側にアトリや庭、家屋の裏に家畜小屋を建てる。大

島空府地区の民家は簡単に移築ができる構造になっている 1585 ため、
赤本名で他地区から民家を移築したり、上家を下家にしたりする
等、頻繁に移築・改築される。井戸は下家に近い部分に設けられ、赤
本名では、農業作業のための牛、自給用の豚飼育が行われたが、機
械化で牛が不要になったこと、昭和 28 年の落雷災害によって豚の落
雷ができなくなったことから昭和 30 年頃から次第に屋敷地内や家畜
が飼われなくなってしまい、現在はかつての家畜小屋が倉庫や駐車場
として利用されている。また、昭和 40 年頃、道路拡幅により高木が
切り倒され、ハブ対策として全員にコンクリートブロック塀（以下、
CB 塀）が普及し、生垣の周りやサンゴ石垣の代わりに CB 塀がつく
られた。

屋敷地の高倉ではモミ、玄米、黒糖が貯蔵され、庭ではモミスリ、
月出きが行われることもあったが、稲作の衰退とともにこれらの作
業は行われなくなり、高倉が崩壊した。飼養の分業化が行われる前
までは、養豚家自宅で飼育飼、飼掻作業者の屋敷地には自給仕手材
場や染色工場が建てられ、庭で染織が行われた。昭和 40 年以
上農業の栄華を味わうなど、現在は屋敷地内の家畜小屋を囲い離れし
経営を設けるなどのようになるが、縦棒が普通型とすると縦板はなくなっ
ていた。製糖業の作業場は塩屋やタヤドリ、富国製糖工場で行われ
るために、屋敷内で製糖業の作業を行う民家は赤本名にはない。

外金久の 1 の屋敷地における昭和初期と現在の屋敷地の配置図
を図 8 で示す。1 件は高倉を有す純農家であったが、小舟を有し自
給用の食物を採取する漁業も営んでいた。海運業が栄えた昭和初期
は海運業にも従事した。昭和 40 年頃にはサンゴ石垣を CB 塀とし、豚
小屋、牛小屋、ヒル小屋を取り崩して縦板を建てる。現在は、庭
には庭園が造られ、縦板を取り壊して倉庫が置かれている。居住
者は現在年金生活であるが、昭和 40 年まで外金久にあった田で稲作、
近世までには湖で稲生産を行っていた。赤本名住民は、中金久に屋敷
地があれば中金久、里に屋敷地があれば里に田畑を所有している。

赤本名では近世時代から赤本名に住み続けていた住民（以下、近
住民）と、明治時代以降に鹿児島等の地域から寄贈したが、それま
赤本名に住み続けていた商人（以下、寄住民）に分ける。前者
は 1 件のように農地を所有し、製糖業、絞油業、海運業、自給用
の農業に従事する。後者は農地を所有し、商売・飲食業を専業し
ている。近住住民の屋敷地は 1 件と同様で、高倉、縦板の有無は
居住者の農業、縦業の規模による。寄住民の屋敷地で近住住民の
屋敷地と異なるのは、高倉、家畜小屋、道沿いの生垣を設け、県
道沿いに店舗を設けることである。昭和初期では、寄住民の屋敷
地に平屋の店舗建築が建てられたが、昭和 40 年以降は 2 階建ての店
舗建築が建てられている。

7. 結論
7-1 生活・生業の変遷
赤本名池が使用されていた明治〜昭和 30 年代までの赤本名の主な
生業は製糖業、絞油業、海運業、商業であり、自給用の農業も営んでいた。
近住住民は自給用の米と換金用の米を生産し、5 人ほどが寄合に
寄するタヤドリにおける砂糖製法に従事した。一部の近住住民は製糖
業も営み、養豚から飼の検査までの絞油の全行程が行われた。近住
住民は海運業に関する組織を所属し、寄住住民である池部高崎のもの、
商店の赤本名港、赤本名港 - 船番間の運送を行った。赤本名港では、
赤木が生産され、製糖業や醸造の盛栄により、黒糖や精米出荷量が変化した。一方、寄宿住民は商業、旅館業を専業で営んでいた。
昭和37年から赤木名で富国製糖工場が操業するため、サッパドリは使われなくなったり、近世住民が果物査査、送達業を清酒業に為することになった。さらに、精糖製糖の船輸の大型化により赤木名港が使用されなくなると赤木名で海運業が行われなくなった。醸造業は戦後分業化が進み、赤木名では主に機械化変わりが行われた。昭和40〜50年代の大島醸造株式会社により、一部の近世住民が組み工場に設けられ、赤木名の多くの女性が職工として醸造に従事したが、昭和50年代頃から韓国醸との競合により生産量が減少した。農民は、戦後、主食が甘露煮から米になったが、昭和47〜49年の値反動により多くの近世住民が投作をやめた。
現在、赤木名では機械化とハブの被害から農耕機が導入されていくものので、昭和37年から変わらない畑作米倉と醸造製造が営まれ、大島一の生産量を有している。大島醸造株式会社が生産した現在の赤木名では、機械は主に自家人で行われ、商売は大島北部の住民の生活消費や海運業を主に提供している。現在の赤木名では投作は行われておりず、経済作物として果樹を栽培する近世住民が増えている。
7-2 空間構造の変容
近世の赤木名では集落東部に代官屋敷、集落中央に与人役所、横行役所、集落北方に船倉が置かれ、代官屋と與人役所、横行役所を繋ぐ道と代官屋敷と船倉を繋ぐ道が敷かれた。代官屋敷の近辺には薩摩国、與人役所、横行役所の近辺には島守屋が建屋構え、釜平湾と前田川の砂州の土壌により、赤木名の集落は西側に広がり、明治時代に外宮久で新しい宅地が造成された。
昭和初期まで赤木名では、桑畑、染物工場、白織物工場、染め用の海水池が置かれ、サッパドリが豊産の近辺で津液が流れる場所に置かれた。赤木名港の近辺には海釣業を営む池田漁業、練査漁業、醸造業、製糖販売業が置かれた。明治年間に与人役所跡とその近辺に小学校と役所、昭和23年に集落外れの田を造成して中学校が建てられた。里山は、溝底に田、集落近くの水はけの良い平野に薩摩、山中に主食の甘露煮が耕作され、里山は薪や茶苗、自給用の草木を採取する原として利用された。
昭和30年代に与人役所近辺の土地に教育委員会、昭和40年に田を作成して高校が築かれた。昭和37年の新富国製糖工場の操業によりサッパドリが塩化にかかり、サッパドリに製糖をやめたことにより、原から賃の採集量が少しなくなった。同年から醸造出荷に赤木名港が使用されなくなると、赤木名から池田漁業、醸造業

| 表1 赤木名の生産の変遷 (注記) 鬱染している時代を太字で示す |
|----------------|------------------|-------------------|

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>製糖業</th>
<th>醸造業</th>
<th>海運業</th>
<th>農業</th>
<th>商業</th>
<th>行政機能</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>明治</td>
<td>大正</td>
<td>昭和37年</td>
<td>昭和40年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

- 沖縄の稔成の活発化
- 大島の醸造業
- これらの変化により、赤木名の経済が大きく変わりました。